

江戸川乱歩と笑い

——「虫」から「黄金仮面」へ——

浜田雄介

本稿は、成蹊大学名誉教授であった羽鳥徹哉先生の依頼により、ある雑誌の「近代文学と笑い」特集のために執筆したものである。掲載前に当該雑誌が休刊となり、そのまま特に発表する意志もなかったのだが、平成二十三年十二月十二日、その羽鳥先生が亡くられた。追悼の思いもあり、本誌に投稿させていただく。

一 笑いが引き起こす殺し

江戸川乱歩の「虫」(『改造』昭和四年九月〜十月)は、笑いが原因となって引き起こされる犯罪を描いている。

両親から若干の財産を受継いだ無職の独身者である榎木愛造は、ただ一人の友人池内光太郎の紹介で幼なじみの女優木下芙蓉に再会する。芙蓉の虜となった榎木は彼女をつけまわし、そしてある時求愛の仕草を示すが、芙蓉は突然笑い出す。

榎木は一生涯、あんな長い笑ひを経験したことがなかった。彼女はいつまでもいつまでも、さもをかし相に笑ひ続けてゐた。だが、彼女が笑つた丈けなれば、まだ忍べた。最もいけないのは、彼女の笑ひにつれて榎木自分が笑つたことである。あゝ、

それが如何に唾棄すべき笑ひであつたか。若し彼があつたらしい仕草を冗談にまぎらしてしまふ積りだつたとしても、その方が、猶一層恥かしい事ではないか。彼は彼自身のお人好しに身震ひしないではゐられなかつた。それが彼を撃つた烈しさは、後に彼があつた恐ろしい殺人罪を犯すに至つた、最初の動機が、実にこの笑ひにあつたと云つても差支ない程であつた。

この笑いには、乱歩自身解説するように、先蹤がある。アンドレーエフの「M.B.C.I.B.」で、乱歩が読んだのは『THE STRAND MAGAZINE』(一九一五年一月号)に掲載された英訳「WAS HE MAD?」と思われる⁽¹⁾。

She began to laugh, and laughed for a long time — as long as it pleased her to do so. Then, however, she apologized.

"Pray pardon me!" she said, and her eyes laughed still. I, too, smiled, and if I could have forgiven her for laughing, never could I have forgiven myself for that smile!

この場面の骨格は兩作でほぼ共通だが、「WAS HE MAD?」において殺されるのは相手の女性タチアナではなく、その夫アレクシ

スである。殺害者アントニーは、犯行動機は嫉妬ではなく、あえて言葉にすれば復讐だったと言う。正気か狂気かの判定を読み手に迫るアントニーの手記は極めて主観的だが、申し立てによれば、彼はその後、求愛の拒絶を後悔させるためにタチアナを愚劣な男と結婚させ、彼女が夫を愛すると見るや今度は夫を殺害するのである。彼の復讐を引き起こしているのはタチアナの笑いであり、右の引用でも印象的な自らの笑いについては、それが彼自らの心の不可解さという作のテーマに連なっていることは明らかだが、直接詳述されることはない。

「虫」における柁木の犯罪には、復讐や嫉妬という枠は与えられていない。柁木は芙蓉の抹殺を意図したわけではなく、「あくまでも彼女が所有したかった」とされる。彼は、執拗に芙蓉を追い回して閨房を窃視し、殺害して死体に語りかけ、腐爛が始まれば化粧し、やがて芙蓉と一体化するように、裂かれた腹部に顔を埋めて死んでゆく。乱歩作品の中でもおぞましい部類に入る犯罪だが、そのような行為の必然を支えるものとして、作品冒頭には詳しく柁木の「病的な素質」の由来が探られる。

両親から若干の財産を受継いだ無職の独身者という境遇は、『屋根裏の散歩者』を始めとする初期乱歩作品に常套的とも言えるが、しかし柁木は、郷田三郎たちのように世の中に「退屈」をしていない。柁木について語られるのは、極端な人間恐怖である。人を前にするだけで涙があふれ、両親や召使いに対しても羞恥を覚える幼少時代。小学校に上がっては先生や同級生に物も言えず、ろくすつ

ぽ教室に顔を出すこともできない。友情や恋にあこがれながら、一歩踏み出そうとすればどうにもならない壁が立ちはだかる。そこに浮かび上がるのは、世界とうまく折り合いを付けられない、ナイーブな少年像である。

柁木には、人に語りかけて、無視されることへの極端な恐怖がある。二人連れで話しながら、その実、自分の話をするだけで相手の話をちっとも聞こうとしないで成り立っている人々の会話というのが、柁木には不思議であった。それは、お互いに「意地悪」をしているとしか感じられない。社交会話における「洒落」もまた、相手の言葉をまともに扱わない点で、意地悪と同じ種類のものであった。

そのような柁木にとって、冒頭に引用した芙蓉の笑いはまさに幼少期から恐れ続けてきた拒絶であったが、それに続いた柁木の笑いは、柁木自らの求愛を冗談にまぎらしたことになる。柁木にとってそれは、彼自身が世間一般の側に立ち、自らの求愛に対して「意地悪」をした事を意味しよう。だからこそ、彼は自らの笑いに身震いをする。そして、言わば自らの誠実を守るために、自らの求愛を貫徹し、徹底して芙蓉を所有しようとするのである。乱歩は、柁木の資質や幼少期からの生育歴を描くことで、笑いが狂気を生むメカニズムに光をあてている。

柁木は「愛について貪婪」に過ぎ、「余りに貪婪であるが故に、彼は他人を愛することが、社交生活を営むことができなかつたのであるかも知れない」。また幼少期の柁木は、女中の手を借りずに床

を挙げたりして祖母に褒められると身内が熱くなる程の恥かしさを覚えたが、「これは彼が、所謂自己憎悪、肉親憎悪、人間憎悪等の一聯の特殊な感情を、多分に附与されてゐたことを語るものであるかも知れない。」かも知れない」と仮説を重ねる分析には、不可解な他者としての柁木を、分析によって理解しようとする語り手の姿勢が顕在化している。祖母に褒められて恥ずかしさを覚える挿話と分析は、自伝的文章「彼」(『ぶろふいる』昭和十一年十二月―十二年四月)にも記されている。自伝だから事実だとは断定できないが、柁木を理解しようとする語り手の姿勢に、世界との違和の淵源を探る乱歩の自己探求が重なっていたことは想像に難くない。

だがその理解はいずれにせよ語り手のものであり、作中人物がそれを知ることはない。おぞましい犯罪を犯した後、柁木は「お人好しの善人」が「天使の様に清らか」な女を殺した残酷な事件があったと警官に訴える。だがいくら事件について訴えても、「警官は笑ふばかりで、てんで取り合はうともしない」。最後まで、柁木は笑ひによって世界から拒絶されているのである。それが現実社会の常態であるならば、語り手の周囲にもまた、同様の世界が広がっているはずだ。「白昼夢」や「踊る一寸法師」など、乱歩の初期作品にはこの種の残酷な笑いを描く作品は多い。

人間の真摯な思いを拒絶し、その拒絶をも隠蔽するのが笑いであるならば、そしてそのような欺瞞に絶えられない人間を狂気の彼方に追いやって秩序を保つのがこの世界であるならば、恐怖に満ちた笑いを世界に突きつける、どんな方法があるだろう。

二 「虫」から「黄金仮面」へ

「虫」を発表した一年後、乱歩は「黄金仮面」(『キング』昭和五年九月―六年十月)の連載を始める。そこに描かれる笑いを、「虫」と比較しつつたどってみたい。

その一。「虫」において、柁木が芙蓉殺害に踏み出した原因は、芙蓉につられた自らの笑いであった。黄金仮面の最初の犠牲者、鷺尾侯爵令嬢美子も、入浴中に、仮面の笑いにつられて笑ってしまった。

ア、今にも、今にも、あの真黒な隙間から、無表情な金色の顔が、覗くのだ。覗くに極つてゐる。とおびえる心が、そのまま、形となつて現はれる様に、そこから、その黄金仮面が、三日月型の口で笑ひながら、本当に、ヒヨイと現はれたではないか。

姫はその刹那、半ば意識を失つて、その黄金仮面の怪物に向つて、まるで仲よしのお友達でもある様に、ニツコリと笑ひかけた。極度の恐怖が――泣くことも叫ぶことも出来ぬ程の恐れが、遂に人を笑はせたのであらうか。

美子の笑いは、不可解である。極度の恐怖が笑いを生んだとすれば、それは無意識の自己防衛であらう。「虫」の柁木の笑いを、その場の自己を防衛するために本来の自己を否定してしまつたと捉えるならば、構図としては美子も同じかもしれない。しかし美子の場合は、「人を笑はせたのであらうか」すなわち「人」一般の心の問題とされて美子個人の内面には立ち入らず、しかもただちに死が与

えられる。黄金仮面は「姫の不思議な笑顔に誘はれた様に」浴室に入るが、「誘はれた様に」とは語り手の見立てであり、仮面は迷いなく美子を殺害する。

その二。「虫」において、芙蓉を殺害した柁木はそのことを警官に訴えるのだが、警官は相手にせず、笑うばかりである。柁木の告白には疑いない狂気がにじみ出ており、警官の対応は常識人としては妥当なものと思まれる。これに対し黄金仮面は、そのように笑われることを積極的に活用する。大真珠「志摩の女王」を盗んだ黄金仮面を追って演芸場に入った警官は、観客に捜査協力を要請する。だが、舞台ではまさに新作喜劇「黄金仮面」が上演されていた。

ドツと笑ひ声が起つた。突然、今演じつゝある喜劇の主人公の名前が出たからだ。ある者は、この捜査も実は役者の扮装したもので、こんなおどかしを云つて、あとで大笑ひをさせる魂胆だらうと思つた。

柁木を笑つた警官が、ここでは笑われる側にまわる。そこに登場するのが、追われていた黄金仮面である。

「捉へてくれ。そいつが曲者だ。そいつが本当の曲者だ」
お巡りさんの真に迫つた悲痛な叫び声。だが、見物の笑ひは止まらぬ。

「やれ、やれ、しつかりやれ」
弥次馬が面白がつて、頓狂な声で怒鳴る。

社会的な常識の側が異常を笑い飛ばす構図は「虫」と変わらない。だが、想像力が異常性の内面に向かう前に、仮面が明らかにするの

は、虚構と現実とがいつも簡単に転換してしまふ不思議さであり、そのことに気付こうとしない群衆の一種無気味な狂騒である。

その三。「虫」において、柁木の求愛に対して芙蓉が最初にしたのは、高らかに笑いとばすことであつた。柁木への侮蔑にせよ身を守る方便にせよ、相手に対する攻撃的な笑ひである。「黄金仮面」のクライマックス、F国大使ルージェール伯の晩餐会では、やはり攻撃的な笑ひが、輪唱のように次々に起こる。伯に撃たれた黄金仮面の仮面がはがされ、浪越警部が病院への移送を命じた時――

だが、刑事達は躊躇した。波越もギョツとして部屋の中を見廻した。どこからか、異様な笑ひ声が増えてくるのだ。瀕死の黄金仮面は、しかめ面をして苦悶してゐる、笑ふ筈はない。では一体何者が、この重大な場合に笑ひなぞするのだ。

笑っているのは西洋悪魔、それに扮していたのは探偵明智小五郎であつた。

「イヤ、ごめん下さい。人騒がせのお茶番が、あんまりをかしかつたものですから。」

傷ついた黄金仮面が偽物であり、本物の黄金仮面が室内にいることを知る明智は、警部を止めて尋問を開始する。その結果、偽物の黄金仮面は犯人を指さして死んでゆく。

死にゆく者を前にして笑うことができるのは明智ばかりではない。警視総監は、明智の告発を信じない。「ワハハハ……、これはいかに。いやに滅入つてしまつたぞ……サア、皆さん舞踏を続けてください」。正体を暴かれた黄金仮面すなわちルパンは、余裕で明智

を称える。「アハハハ……日本の名探偵明智小五郎君、よくもやつたね。イヤ、感心々々、アルセーヌ・ルパン、生涯覚えて置くよ」。しかし日本の警察につかまるほど間抜けではないと笑うルパンの背後から、大時計に隠れたエベール副長が現れる。「ハハハ……、フランスの警察官には捕まる間抜けか」。

彼らは、おかしくて笑うのではない。笑いは、あるいは人々を不安にさせ、また逆に落ち着かせ、相手に揺さぶりをかけ、自己の優越性を見せ、時間をかせぎ、といったさまざまな思惑で、効果を計って使用される。それらは主体の心情から切り離された技術に過ぎない。乱歩通俗長編の悪漢たちと明智小五郎とが、お互いに相手の勝利を転倒させる笑いを交わし、そこにゲームを競う好敵手というべき雰囲気醸し出される様式美については知られていよう。笑いは、言わばチャンバラにおける刀剣である。

三 仮面の笑い

黄金仮面に向かい合う人々の笑いを以上のようにたどってみると、それぞれ「虫」の笑いに出自を持ちはするものの、その性質や機能は大きく異なる。個人の内面から切り離されることで、本質的にはおぞましさを増幅させているのだが、作品の印象は明朗快活、おぞましさに沈潜することはない。このような笑いは必ずしも「黄金仮面」だけの特徴ではなく、「蜘蛛男」「吸血鬼」をはじめ多くの通俗長編に共通するものだが、「黄金仮面」には、ことさらにわかりやすいビジュアルイメージが与えられた。言うまでもなく、黄金の仮

面である。仮面は、次のように笑う。

燐光のスポットライトが、闇の中に、怪物の顔の部分を丸く浮き上らせた。舞台にはたつた一点、金色のお能面の様な顔丈けが、燐光に燃えてゐる。

と、どこからともなく、シュー／＼といふ、変な音が聞え始めた。同時に、仮面の黒く割れた口が少しずつ形を変へて、遂に大きな三日月型の、笑ひの表情になつた。見物達が思はずギョツとして、耳をすますと、シュー／＼といふ音は、怪物の笑ひ声であることが分つた。ア、何といふいやらしい笑ひ声だつたらう。いつまでも／＼笑つてゐる。そして、見ると、笑ひながら彼は血を吐いてゐるのだ。細い細い糸の様な一筋の血が、ツーツと顎を伝つて、その末は、顎の先から、ポタリ、ポタリと雫になつて落ちてゐるのだ。

先に引用した興行芝居だが、ここで黄金仮面に扮しているのは役者ではなく本物の黄金仮面である。三日月型の口の笑い顔、シューシューという笑い声といったイメージはこれ以後の事件の展開でしばしば繰り返される。

引用部には芝居の上の演出が含まれるとしても、口から滴る血、というのには黄金仮面にとって何を意味するのだろうか。「黄金仮面」とほぼ同時に『報知新聞』に連載された「吸血鬼」に重なるイメージも一方にはあつたかもしれないが、作品において現実に血が流れるのは、ルージェール伯の舞踏会において撃たれる場面である。ここで仮面を付けていたのは黄金仮面の手下で、狙撃したルージェー

ル伯こそ本物の黄金仮面であった。仮面の笑い顔が隠していたのは、裏切られて死んでゆくものの苦痛である。作品前半の小雪の死も、直接仮面から血を流しはしないが、同じ構図で響き合うだろう。仮面を強いられた者達は、それぞれに「虫」の柩木にも通じるような苦悩や苦痛を持っている。しかしそれらは、仮面の笑いには決して反映されない。個としての内面がどのようであろうと、仮面は笑い続けるのである。

内面と切り離された仮面の笑いは、たとえば次のように繰り返し返される。「怪物は又しても、例の三日月の唇で、顔一杯の笑ひを笑つた。」「細い眼と、例の三日月型の不気味な唇の端が、ゾツとする笑ひを笑つてゐる。」「彼はその血の色を顔一杯に輝かせて、例の三日月型の唇を歪め、ゾツとする様な、笑ひを笑つた。」「お揃ひのソフト帽の下から、四つの無表情な金色の顔が、ボンヤリと見え、その三日月型の唇が耳まで裂けて、声のない笑ひを笑つてゐるのかと思ふと」

笑う時の唇がいつも三日月型というのは、表現上のワンパターンというよりも、「三日月型の唇の笑い」というものが認識や表現の一つの単位となっている様子である。「笑いを笑う」と名詞化された笑いは、これは乱歩の文章の癖でもあろうが、映画の大写しのように、独立した存在感を表情に与えるだろう。そして独立した笑いは、付け替え可能、移動可能なモノともなる。実際に右の四つ目の例では、四人の人間が、首領から配布されたのであろう同じ笑いを顔に付けているのである。

この笑いは、作品の文章内だけにとどまっていなかった。初出の『キング』では、この笑いが吉野二郎の挿絵によって視覚化された。連載中は毎回五葉、少ない時で三葉の挿絵が付されたが、その中の三分の一以上で黄金仮面の笑い顔が大きく描かれている。また、連載中に企画され、六年五月から刊行が始まる平凡社『江戸川乱歩全集』では、内容見本の表紙に岩田専太郎の描く黄金仮面の笑い顔が描かれ、月報代わりに付された冊子『探偵趣味』の第一号の表紙にも同じ絵が掲載された。

『江戸川乱歩全集』は乱歩自身の発案も含めてあの手この手の宣伝攻勢がかけられたが、三日月型唇の黄金仮面はそのCMキャラクターを務めるような形になった。新聞広告には大小の黄金仮面が繰り返し笑い顔を見せ、全国の書店店頭には黄金仮面の顔をつないだポスターがぶら下がった。セルロイド製の黄金仮面がビルの上から撒かれ、黄金仮面の顔が飛び出す宣伝チラシを黄金仮面姿のチンドン屋が配るといふ、作中世界が現実世界かわからない空前の祝祭が現出した。思い切つてばかばかしい三日月型の唇の笑い顔が、笑いによって人を結びつけ、乱歩作品未読者も巻き込んでしまふお祭り騒ぎは、作品に描かれている構図そのままである。

『黄金仮面』の『キング』連載から『江戸川乱歩全集』の刊行にかけての騒動を、『探偵小説四十年』は「虚名大いにあがる」と題している。探偵小説壇のトップランナーからジャーナリズムの寵児へという転身に重ねて、初期短編から通俗長編へと作品の変質を読むのが一般に認識される乱歩の軌跡であろう。「黄金仮面」は後者

の代表的な例であり、「虫」は両者の境界線上に位置する作品とひとまずは言えようか。

しかし「笑い」に着目して二つの作品を並べると、問題はそれほど単純ではない。「黄金仮面」の笑いは、確かに「虫」に存在した個の内面への探究を切り離れた。それは、通俗においては邪魔という判断にも見える。だが、内面を切り捨てるならば、仮面などかぶる必要はない。仮面をかぶせ、奇妙な笑いを浮かべさせるのは、その向こうにあるものへの想像力をかき立てるためではないのか。仮面の笑いは、何かを隠している。その隠されたものの恐怖の甘やかさこそが、読者を誘っていたはずだ。おそらく、通俗とは、その誘惑をめぐる感受性のことであり、その感受性に働きかける恐怖に満ちた誘惑こそが「黄金仮面」における笑いであったのではないか。

注1 桃源社版『江戸川乱歩全集5』（昭和三十六年十二月）の「虫」のあとがきに「私は狂人か」というタイトルとして言及される。『THE STRAND MAGAZINE』の調査にあたっては平山雄一氏の協力を得た。

（はまだ・ゆうすけ 本学教授）